



体験の対象をさらに拡げるため、枠組みを発展させた「全国児童 自然体験絵画コンテスト」として開催。幅広い自然体験が寄せられた入賞作品と国広富之審査員長

## 「水辺」から「自然体験」へ。 自然との触れ合い体験を促す 絵画コンテストに発展・拡張。

「全国児童 水辺の風景画コンテスト」は、日本マリンスポーツ普及教育振興財団(JMPF)とフィッシャリーナ協会の後援を得て、ヤマハ発動機が平成元年にスタートした「ヤマハ全国児童 浜の風景画コンテスト」を起源とする。第9回コンテストからは主催団体がJMPFに移管され、そのJMPFの事業を継承したYMFSが第19回から主催している。

水辺の絵を描くことによって、海や川、湖といった自然環境、またそこで働く人々や棲息する動植物等に関心を高めてもらおうと企画された絵画コンテストだが、YMFSは屋外に出かけること、身体を動かすこと、またスポーツへの入口として「水辺での体験活動」にフォーカスして取り組んできた。審査員も「実際に水辺に出かけて体験したことを、どのように受け止め、どのような感性でそれを表現しているのかを見極めたい」と、子どもたちの「体験」そのものを重視した審査を行っている。

2023年度からは、その対象をさらに拡げるため、コンテストの枠組みを発展。自然全般との触れ合いを促す体験型の「全国児童 自然体験絵画コンテスト」として募集を行った。この結果、全国の幼稚園、保育園、小学校、絵画教室等から寄せられた8,718点の作品には、従来の水辺だけでなく、山の風景や星空をはじめ、キャンプやハイキングなど、幅広い自然体験が描かれていた。

コロナ禍前の日常を取り戻しつつある中、子どもたちが自然の中に身を置き、アウトドアレジャー等に親しむ機会も増えている。審査員長の国広富之画伯は、「日本は美しい自然を残す国。子どもたちがこれからもその自然の中で豊かな体験をし、また描いていけるよう、大人たちが頑張ってこの自然を残してなくてはならない」とリニューアルしたコンテストを振り返った。

# 2023/2024 令和5年度

5月に新型コロナウイルスが5類に移行し、スポーツ大会でも声出し応援が解禁。コロナ禍前の日常を取り戻しつつある中で、各競技の世界大会や2024年パリオリンピック・パラリンピックの予選大会が開かれ、日本代表チームや日本人選手が活躍。WBCでは日本代表・サムライジャパンが3大会ぶり・3回目の優勝を飾った。

### チャレンジ支援事業

「伸びしろのある未来人材」の支援を主眼とする助成事業。18期生の平均年齢は、体験助成が17.1歳、研究助成が30.4歳となった。また17期生のチャレンジでは、吉田陽菜選手と千葉百音選手が大きな成果を挙げ、優秀賞を受賞した。



#### ■ 2023年度(第17期生)助成概要

|      | 申請数 | 採択件数 | 助成金額     |
|------|-----|------|----------|
| 体験助成 | 42件 | 15件  | 1,499 万円 |
| 研究助成 | 46件 | 16件  | 1,514 万円 |
| 計    | 88件 | 31件  | 3,013 万円 |

#### ■ 第16回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



遠藤 謙 氏  
Blade for All  
「だれもが走れる社会を実現するために」

### スポーツ体験促進事業

#### ■ ジュニアヨットスクール葉山

新年度は15名のスクール生でスタート。夏休みには4年ぶりとなる合宿を浜名湖で実施した(4泊5日)

#### ■ セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

第32回大会は、OP初級、OP上級、ILCA4級、ILCA6級、の4クラスを開催。全国から集まった50名(艇)のジュニア・ユースセーラーが参加した。

#### ■ 全国児童 自然体験絵画コンテスト

全国から8,718点の作品応募があり、入賞24作品(入選286作品)を決定。入賞作品は当財団ホームページや「ジャパンインターナショナルポートショー2024」の会場にて展示・公開した。

#### ■ スポーツ教材の提供

全国582校・団体から申請を受け、抽選会を経て120校・団体にポッチャポールセット、タグラグビーセットを提供した。

#### ■ ユニバーサルスポーツ体験会

静岡県内の小中学校10校で「チャレンジ★ユニスポ」を開催し、児童・生徒、教員合わせて685人が参加した。

#### ■ 調査研究

障害者スポーツの調査研究成果を報告書にまとめて発行したほか、シンポジウム「障害者スポーツ競技団体の実情 ～東京2020パラリンピック終了後の課題と今後の展望～」を開催

